

第38回 日本泌尿器科学会中部総会 シンポジウム 1

「職業と尿路腫瘍」

京都大学医学部泌尿器科学教室（主任：吉田 修教授）

吉 田 修

司会のことば

本シンポジウムの目的は二つある。一つはベンチジン、2-ナフチルアミンによる職業性膀胱癌を臨床の立場から総括することである。わが国ではベンチジンは1970年に、2-ナフチルアミンは1971年に製造が中止されたが、その時点で約3,300人が危険人口であると報告された。それから20年近くが経過したが、これら危険人口の発病の実態は？ その予後は？ もう日本では職業性膀胱癌は今後発生しないと言えるのか？ これらの点を今明確にしておくことは、臨床の立場からしても重要なことである。

今日まで職業性膀胱癌は労働省管轄のもとで取り扱われ、学会においても公衆衛生学者が、どちらかというややクローズされたかたちで論議されていたように思われる。しかし、実際に患者を治療するのは泌尿器科医であり、わが国の職業性膀胱癌の実態を知ることはぜひとも必要なことである。

膀胱癌の発生要因にはベンチジン、2-ナフチルアミンによる職業性以外にも、ある種の職業が関連していることが知られている。この点を検討するのがもう一つの目的である。膀胱癌発生要因として喫煙は重要であるが、職業的要因とも関連させて論ずべきであろう。

このシンポジウムでは職業性膀胱癌の検診と治療に直接携わった方にも参加願って、全国的集計を行い報告していただいた。また膀胱癌発生要因に関連する職業の検討は疫学的立場からは勿論のこと、生化学的にも討議された。

この記録は泌尿器科にとって貴重なものになると信ずる。本シンポジウムに参加された皆さんならびに大川順正会長に謝意を表する。

(1989年7月1日受付)